## 慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	宮本又次著 フランス経済史学史
Sub Title	
Author	渡辺, 國廣
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1962
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.55, No.1 (1962. 1) ,p.93(93)-
JaLC DOI	10.14991/001.19620101-0093
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19620101-0093

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

本から、 説の根拠となっているところの、 いにそそるものであるが、むしろそうした仮 説得力ある説明とは、いつも読者の関心を大 らない。氏のユニークな仮説の提示の仕方と 意とするところにしたがって、たとえばこの 味で、 は希望したい」と述べる。われわれも著者の 要なファクト・ファインディングが行われて 究態度がまさに正反対となっている。 いるかということを看過されないように、私 日本経済がたんにその素材として用いられて いるにすぎないように考えている人とは、研 は、理論を応用するといったことが 主たる関心をいだく最近の実証分析のタイプ からみれば、たしかに異端であろう。 にあてはめてプロジェクションを行うことに とりくまれてよいと、 樹立がもっと重視され、これにもっと真剣に いるのと同様に、経済の実証分析においてフ で発見とか新しい仮説が一ばん重要視されて ……このような行き方は、統計数字をモデル クト・ファインディングとか新しい仮説の 本書を評価なさる場合には、幾何の重 経済発展の運動法則をひきだそうと 成長と循環の理論的図式を学ぼうと 本書に性急な評価を与えてはな かねがね考えてきた。 ,中心で、 この意 あるい

対する著者のふかい読みにこそ、学ぶものを対する著者のふかい読みにこそ、学ぶものゆたがな洞察力と警抜な着想とが、新鮮な刺戟とかな洞察力と警抜な着想とが、新鮮な刺戟となるべきであろう。

本書は戦前戦後の日本経済の高度成長とよ済におけるいわば成長における輸出ドライヴ説た第二篇、高度成長における輸出ドライヴ説を論争を中心として展開した第三篇の三部から成る。それぞれの篇はいちおう独立しているが、著者がいだいている日本経済へのヴィション――貿易と二重構造――といったものが、一貫して脈打っているのである。

高度成長を実現した要因はなんであるか。高度成長を実現した要因はなんであるか。 高度成長を実現した要因はなんであるか。 高度成長を実現した要因はなんであるか。 高度成長を実現した要因はなんであるか。 高度成長を実現した要因はなんであるか。 高度成長を実現した要因はなんであるか。

> きどころがまったく位置を変えた観がある。 素者はこれに対し、戦前からの高い日本の成長率を、高い輸出成長率という要素に焦点を当てて解明する。高い輸出成長率が国内成長率をひき上げ、国内市場を拡大する効果が非常に大きかった、つまりある意味では古典が的な成長のプロセスが強調される。それなら、高い輸出成長率を可能にしたものはなんら、高い輸出成長率を可能にしたものはなんら、高い輸出成長率を可能にしたものはなんら、高い輸出成長率を可能にしたものはなんら、高い輸出成長率を可能にしたものはなんら、高い輸出成長率を可能にしたものはなんら、高い輸出成長率を可能にしたもの表別として、二重構造の分析を企を説明する要因として、二重構造の分析を企を説明する要因として、二重構造の分析を企

のである。 
こ 
重構造の分析は、「資本集中」 の仮説によって代表される。つまり、低賃金を基盤として輸出産業を発展させながら、この輸出の高度成長の結果を、いわゆるビッグ・プッシュの形で国内資本の高蓄積に充てたというもつである。

九〇〇円) ――大 熊 一 郎― (創文社・三六年 六 月刊・A5・三九八頁・にこそ、ふかく学ぶことが必要なのである。にこそ、ふかく学ぶことが必要なのである。

## 『フランス経済史学史』宮本又次著

経済史の研究は世界的に重要な地位を占めるようになった。フランスでも研究体制を整え、予期以上の成果を挙げつつある。誰によって、どんな研究が出されたか。そこにはフランスなりの方法があるわけだが、特徴は何か。本書はこうした問題に答えることを直接か。本書はこうした問題に答えることを直接か。そのための有益な指針が本書から得られるに違いない。

合、史料の直接参看は不可能である。外国の格的なものがあった。序にみる如く、それは極的なものがあった。序にみる如く、それは極いないのがあった。序にみる如く、それはが国経済史研究の方法そのものに関連した。

学者が示した研究を判読し、それを手がかりに理解しなおすほかない。著者はこれこそが外国経済史研究の効果的な方法という。そうれわれにとり生の素材であり、素材に対するれわれにとり生の素材であり、素材に対するでどれほどの位置を占めるかといったことへでどれほどの位置を占めるかといったことへの反省が外国経済史研究で第一の階梯となろう。いわば史料批判にでもあたろうか。本書う。いわば史料批判にでもあたろうか。本書の下でするなかで史学史的考察の必要はますます化するなかで史学史的考察の必要はますますといえよう。

著者は昭和廿九年から一年間滞仏した。本書の第二部はその間の見聞を基礎に、大阪大学経済学部の機関誌『経済学』に連載されたものの集成である。これによって最近の動向を知ることができよう。本書の第一部はかつて著者が『歴史と経済社会』(昭和廿三年刊)の一部として発表したものの転載で、若干補管として発表したものの転載で、若干補管を扱う。著者の指摘によるまでもなく、フランスで経済史は長く片隅に捨てられて来た。ルヴァックが現われ、注目すべき業績を残してプロックが現われ、注目すべき業績を残してプロックが現われ、注目すべき業績を残して

一〇〇円) 一波 辺 國 廣一 一〇〇円) 一次 であった。(ミネルヴァ 書房・昭和三六年 がわる問題であろうが、本書では立入った言 及がない。もっとも知りたかった点だけに残 をであった。(ミネルヴァ 書房・昭和三六年 大利刊・A5・本文三六四頁ほかに索引・一 十月刊・A5・本文三六四頁ほかに索引・一 一〇〇円) 一波 辺 國 廣一

## 『マルクス計量経済学』越村信三郎著

経済学に数学を使用すること、それは数量をあつかう科学、すくなくとも量的側面をもつ科学である経済学にとって当然のことであるように思われる。量的な関係を通常の言葉でのべることには限界がある。ごく簡単なことがらから一歩前進しようとするとき、数学は必須の用具となる。数学は量的な科学にと

マルクス経済学においても、多くの偏見が

九三(九三)

新刊紹《